

# 子供時代の無垢・性愛・死

## フランソワ・モーリヤックの小説における水

福田 耕介

### 1 水と子供時代の無垢

フランソワ・モーリヤックは様々なエッセーの中で子供時代の無垢の重要性を強調する。その理由は、マリ＝フランソワーズ・カネロが言うように、「子供時代が彼にとって人間存在の真実であり、人間が最も神意に適っている時期である<sup>1</sup>」からであり、「我々の存在の最も埋もれた部分」である「悪を知らず、そのことで神に似ていたこの子供<sup>2</sup>」に戻ることが、大人になった我々が再び「神の国へ入り込む<sup>3</sup>」ために要求されるからなのだ。墮落した生活にもかかわらず我々の内に保たれているこの子供時代の無垢を表現するために、モーリヤックはしばしば地下に保たれている純粋な水というイメージを援用する。『ある人生の始まり』の一節を引いてみよう。

ところが、その時奇跡が起こる。日常の過ちの厚い表皮の下に、子供時代の全く純粋な水が保たれていたのだ。恩寵によって開かれた通路を通して（地雷の炸裂した後のように）、水流がなだれ込み、全てが同時に改変した魂に返される。夕べの祈り、明け方の聖体拝領、純潔と完徳に対する不安が。(V,79)<sup>4</sup>

---

<sup>1</sup> Marie-Françoise Canérot, « Le temps dans *Le Noeud de vipères* et *La Pharisienne*, in *Roman* 20-50, No1, p.42.

なお、モーリヤックの作品からの引用は、特別の指示のない限り、次の五冊のブレイヤード版による。本文中の引用文の最後に巻数をローマ数字で（『自伝作品集』をVとした）、ページ数をアラビア数字で示した。

*Œuvres romanesques et théâtrales complètes*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t.I-IV, 1978-1985.

*Œuvres autobiographiques*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1990.

<sup>2</sup> François Mauriac, *Le Fils de l'homme*, Grasset, 1958, p.7.

<sup>3</sup> François Mauriac, *Vie de Jésus*, in François Mauriac, *Œuvres complètes*, Arthème Fayard, « Bibliothèque B. Grasset », t.VII, p.109.

<sup>4</sup> 他にも、「続内面の記録」の「子供時代の天国の河は、地下に姿を消していたのだが、お前の最後の日々砂漠の中に噴出する」(V,691-692)という一節や、『ブロック・ノート II』の、「宗教

子供時代の無垢の具現として作中人物を改悛へと導く水の流れは、モーリヤックの小説中にも様々な形で浸透している。『海への道』では、ピエール・コスタドの内では子供時代と水が合わさり、「彼自身も知らぬ天職は犯罪である」(III,590)とされるランダンに感化を及ぼす。ランダンの目に「まだ子供時代のすぐそばにいる」と映るピエールが、彼に対して「私たちの行為には無数の源があるのです。私たちの故郷の小川のように。ご存知ですか。泉は沼の多い草原の至るところから吹き出しています。でもはんのきの根の間を流れるただ一筋の水は、透明なままであり天上の流れのままなのです。」と説くのだ(III,684)。この言葉は自分で自分を悪に染まった人間と決め込んでいたランダンの目を覚まし、「本当の生活は存在する」(III,686)というモーリヤック世界の真理を彼に悟らせるに至るのだ。

『黒い天使たち』では、水と無垢との結合は殺人犯ガブリエル・グラデルまでをも救済する。彼が司祭館の前に撒かれたつげの枝を掃除して司祭を村人たちの嘲笑から救う場面の直前に次のように書かれている。

道はバリヨン川を横切る。ガブリエルは小石の上を流れる水の音を聞いた。ほんの子供の時に耳にして以来、途絶えることのないこの音。我々が何を犯してきても、我々を裁くことなく、それでいて我々に働きかけ、後悔や感動を呼び覚ますこの世界…この物質…(III,248)

「子供の時」から続くこの水の音が、ガブリエルの内に「無垢のまま残っていた善意と愛の力」(III,249)を呼び覚まし、彼は悪に染められた「自分の運命のラインにはない行為」(III,249)を遂行するように促され、司祭館の前に撒かれたつげを取り除く。そしてこの「善意」の結果露出した「擦り減った古い石段」(III,250)の表情が作品の要所で想起され<sup>5</sup>、結末のガブリエルの救済に信憑性を与え得る要素となっているのである。故郷の水が主人公が宗教へと導かれる過程の要にあることは明らかであろう。

水が浄化するのは無論、犯罪による汚ればかりではない。『悪』の中では、ランドを流れる水が、肉体の目覚めにとまどう思春期のファビヤンを保護す

---

に満ちた心を焼きつけていた人生のあらゆる情念も、深層における浸透、子供時代以来蓄えられてきたこれらの水を中断させたことは一度もない。その水は、それに、子供時代に発しているのだ」(François Mauriac, *Bloc-notes*, t.II, Seuil, coll. « Points essais », 1993, p.292)という箇所を挙げることができる。

<sup>5</sup> ガブリエルが司祭館に収容される場面(III,353)、結末のアンドレスとアランの和解の場面(III,367)など。

る役割を果たす。

この地方ほど裸で、平板で変化のないものはない。しかしながら、そこでは、砂岩と呼ばれる土によってオーカー色に染められた隠れた水の流れが、はんのきの覆いの下に身を震わせていて、凍りつくような泉がはっかの間から湧き出ている。それで、意識的に愛を断とうとしながらも愛に震える心が恩寵に満たされるのだ。夕べには、静寂はとても深く、この目に見えぬ水の音が聞こえてくるほどだった。そこでは長い苔の髪が揺れている。それは溺れ、打ち負かされたニンフであり、汚れのない砂と無垢な水の奥底にはまりこんだニンフなのだ。(I,654)

主人公の子供時代と強く結びついた故郷の水は、ニンフを縛り付け、ファビヤンが誘惑に屈して子供時代の純潔を失う時を遅らせるのだ。

『火の河』では、愛人を逃れてピレネーに來たダニエル・トラシスが「清流」を目にして「あらゆる汚れの消去」「水による再生」(I,515)を願う。見落としてはならないのは、こうした彼の欲求の根底に、「清澄に対する奇妙な渇き」(I,507)を彼に植え付けた幼友だちマリ・ランシナングの姿のある点だ。それによって水とダニエルの子供時代とがここでも結びつくことになる。無垢なマリに取りつかれたダニエルは女性の間を渡り歩きながらも「渇き」のために満足を得ることができない。ダニエルが女性に期待していることが実は浄化であることを暗示するかのように、マリはダニエルの記憶の中に「洗う女性」として現れ<sup>6</sup>、また結末においては、ジゼール・ド・プラーイに導かれて彼は教会の「水」に達するのである<sup>7</sup>。モーリヤックの小説世界でしばしば信仰を呼び覚ます力を持つ子供時代の無垢を保つ作中人物が、ここでは水と結びついているのだ<sup>8</sup>。

---

<sup>6</sup> 「彼は彼女〔マリ〕が洗っている赤いタイル、水で一杯の鉢、壁の石灰の上のキリストの十字架像を見た。」(I,511)

<sup>7</sup> 「息を殺して後ずさりしながら、彼〔ダニエル〕は扉に達し、手を聖水に浸し、額、胸、肩に触れ、立ち去った。」(I,579)

<sup>8</sup> 同様の役割を『上席権』のオーギュスタンにも見ることができる。まず、「オーギュスタンの最も秘められた魅力」は「無垢と完徳を好むこと」にあるとされる(I,412)。また、フロランスがオーギュスタンに望んでいることは名譽欲のために彼を裏切った彼女を「洗う」ことである。「何をもってしても私たちを洗うことはできないわ。何をもってしても、何をもってしてもね。」(I,412)とフロランスが繰り返す時、語り手は、「姉さん、オーギュスタンだけは、あなたを赦すことができますよ。」(I,413)と答えるのだ。こうしてオーギュスタンにおいて「無垢」と「水」が結びつく。さらにオーギュスタンはより直接的に「全く無垢なままの水の眠る井戸」(I,413)にたとえられている。

## 2 水と性愛

ところが、モーリヤックの小説の水は、子供時代の無垢の専有物とはならず、モーリヤックがこの無垢とは共存不可能であると繰り返す性的欲望をも<sup>9</sup>、映し出す。水は性的誘惑、さらには性行為そのものの背景を構成する。先ず、水の中の女性の姿が男性作中人物の心を乱す例をいくつか引いてみよう。『上席権』では、「水の中の」フロランスがオーギュスタンを誘惑する。

[...] 十時にフロランスはテラスのすぐ下の水の中ではしゃぎ回った。水を滴らせ、両手で唇を包み込みながら彼女は一緒に浴びよう我々を誘った。この呼びかけにオーギュスタンは逃げ出した。彼は海からできるだけ離れたところへ私を引っ張って行った[...]。(I,346)

「完徳」と「諦念」を愛し、「無垢の友」(I,393)であるオーギュスタンの逃亡が、何よりも彼の受けた誘惑の強さを示している。

水の中の女性はまた、禁じられた欲望をも呼び覚ます。『失われしもの』の中で、トータは兄アランの「ほとんど滑稽なまでの羞恥心」を夫に納得させるために、「私が泳ぎに行く時、川の方には誰も立ち入ることが許されなかった。」(II,359)と語る。しかし、アランによってなされた禁止が示しているのは、アランが彼自身の妹に対する欲望を恐れ、さらには他の者が妹に欲望を抱くことを恐れていたということである。それ程川の中の妹の姿は彼にとって肉体的魅力に満ちていたのである。

水浴する女性はただ単に性欲を掻き立てるだけではない。モーリヤック小説の水の特異性がよく現れるのは、『ありし日の一青年』において、ジャネット・セリスが水の中へ入る時であろう。彼女の姿は、主人公に「悪い考え」ではなく「神が存在するという明白さ」(IV,791)を感じさせるのだ。ほとんど裸の少女が問題となっている時にも水は、我々が前節で考察した作中人物を信仰へと導く力を発揮し得るのである。

この水の二重性をさらによく観察するために、性交の場面に着目してみよう。特筆すべきなのは、モーリヤックにあって決して数の多くない性行為の描写のほとんどが水に伴われていて、そこにこの二面性が見て取れることである。『癡者への接吻』のジャン・ペルエールとノエミはアルカッションで新婚初夜を過ごす。そのことは当然、彼らの愛の物語に海の描写を混入させ

<sup>9</sup> 例えば『内面の記録』の中では自己の子供時代を振り返って次のように記している。「私はよく子供の愛について話されるのを耳にする。多くの友がかつて無垢であったという記憶はないと私に言った。しかし、天使たちの間で生きよう定められているかのように保護されていた私の種族のものに対しては、何も未知の訪問者を告げてはいなかった。肉と血は何らかの天上の魔術によって鎖につながれていたのだ。」(V,377) 同様の記述は『ある人生の始まり』(V,79)、『我が信条』(V,586)にも見出せる。

る。性行為の前には、「開いた窓を通して入ってくる湾の息は、魚や海草や塩の匂いがした。」(I,466)と記され、行為の後には、「彼女の足に接吻し、目覚めさせずにこの柔らかな体に手をかけ、そのように保ちながら沖合いへと走り、純潔な水泡に引き渡せるものならそうすべきであった。」(I,466)と書かれている。最初の例において海の匂いが暗示するのは性行為の際に人体の発する匂いであり、水は性行為を指し示す。それに対して、行為後には、水は「純潔な水泡」となり、ジャンの欲望によって汚されたノエミの肉体の浄化と新たな誕生を想起する要素となり変わるのだ。

『火の河』の「清澄さへの渇き」を持つダニエル・トラシスは、ジゼール・ド・プラーイと出会った時にも、「この体を奪いたいという欲望」(I,515)と「清澄さ」を求める気持ちの間で引き裂かれる<sup>10</sup>。彼がジゼールと結ばれる場面では、水は一方で『癡者への接吻』の例同様、肉体関係を想起する。

この夏の夜の草原は海と同じように絶え間なくざわめいていた。清らかな水の愛撫を受けて、草原の匂いは藻類や海草の匂いと同じくらい強かった。(I,547)

この愛の場面はピレネー山中に位置しているのだが、それにもかかわらず、海辺で展開していた『癡者への接吻』同様、性行為を告げる海草の匂いが室内に満ちてくる。その一方で、水は、目立たない形ではあるが、肉体的に結ばれた後にダニエルが失われた「ジゼールの無垢」(I,548)を悔いる文脈にも浸透している。「濡れた葉が鳥の声で満たされてきたので、彼はジゼールを起こした」(I,548)のであり、外では、「霧が鳥の声で鳴り響いていた」(I,549)のだ<sup>11</sup>。

『悪』のファニー・バレがファビヤンに愛の手ほどきをする舞台はヴェニスであり、当然のことながら水には事欠かない。そしてその水にはやはり二つの顔がある。第一に水は肉体に関する「啓示の夜」(I,677)に現れる。寝室を満たすのは「波のひたひた寄せる音」であり、「船首によって引き裂かれ

<sup>10</sup> 『愛の砂漠』のマリア・クロスもレモン・クレージュの「無垢」と自分の欲望の間で引き裂かれる。彼女はレモンの内に「すっかり子供時代に浸った」少年を見出し「彼の無垢は私の欲望さえも歩み続けることを諦める私たちの間に広がった天空である。」(I,819)と感じながら、「乱れた波」「どす黒い渦」(I,818)の揺さ立てられるのを覚えずにはいないのだ。また、彼女にとってのレモンは「『渇きを持つ者』が会おう泉」(I,810)であり、「彼女の砂漠の中の最後の井戸」(I,818)であるとされる。モリーヤックによって子供時代の無垢を表すために用いられる「泉」「井戸」という言葉が、「波」「渦」で示される欲望を満たす行為と結びつけられていることにも、彼の小説世界における水の両義性がよく表れている。

<sup>11</sup> ここでかいま見られている「霧」がモリーヤックの小説の中でしばしば作中人物を洗い清めることを忘れてはならない。『鎖につながれた子供』の中では、霧が子供時代の噴出の端緒となり、「いかがわしい体験の敷居」を越えようとしていたジャン＝ポールを引き留める(I,52)。『失われたもの』ではパリの夜の世界に困惑したアラン・フォルカを「霧」が包み込み、子供時代の田舎を感じさせる(II,320)。また、『悪』では、ファニーの接吻を受けたファビヤンが、「何口かの凍り付くような霧」によって唇を洗う(I,664)。

る渦」なのであり、またこの夜には「雨の日」が続く(I,677)。第二に、肉体の啓示に続いて、ファビヤンは「神の存在」(I,679)を感じとるのだが、その舞台となるバリに向かう列車もまた雨に降り込められていることが背景に描き込まれている。

『ガリガイ』では、ジルとマリが「レーロ河」の岸辺で人目を忍んで会う。最初の密会においては二人は同じ岸に留まり、ジルがマリの「口という開いた果実」や「生きた胸」(IV,414)をほしいままにする。「許された最後の愛撫」(IV,414)にまでは到達しないとはいえ、二人が普段抑えている肉体的欲望を発散する場を提供するのは河辺なのだ<sup>12</sup>。ところが二度目の河辺の逢瀬においては、二人は、それぞれが別の岸に分かれて立つ。

「そうか」とガリガイは理解した。この恋人たちは一本の剣が、液状の、葦の間や石の上で囁いている刀身が、二人を分かつことを望んだのだ。この晩ほど二人が互いにしっかりと混じり合うことは決してないだろう。草木や天体や神や彼らの眠っている父親たちとのこの深い調和を再び見出すことは決してないだろう。(IV,441)

レーロ河は、ここでは先の密会とは逆に二人を分かち、そのことで精神的な次元での深い一体感を二人にもたらす。水が二人の愛から肉体への欲望を一瞬とはいえ、洗い落とすのだ。

『ありし日の一青年』のアラン・ガジャックとマリとの愛の場面も水に伴われている。「最初の接吻」の後、二人は「じっと動かず、言葉を交わさないまま、非常にひそやかでありながら何世紀も何世紀も続き、これからも続いていくであろう水の流れに耳を澄ましていた。」(IV,756)と書かれる。この川の流れは少年であった彼に「自分がはかない存在であると知ること」を、しかも「それを肉体において実感すること」を可能にしてくれたものであり(IV,756)、ここでも故郷の川は作中人物たちが肉欲に身を任せる場を提供するとともに、肉体のはかなさを教え、肉体に全てを賭けて生きるというモリーヤックの糾弾してやまない生き方を戒めてもいるのである。そして、肉体的交わりの結ばれた後には「霧」が再び姿を現す。

---

<sup>12</sup> 『宿命』においてボブ・ラガーブに恋するエリザベート・ゴルナックが、ボブと恋人ボールのデートを想像し、「肉体において結ばれた二人の存在」を思って嫉妬に苦しむのだが、そこでボブとボールの密会の舞台として選ばれているのも川辺である(II,150)。

マリは自分の寝室に戻る前に、松の枝々が身から引き剥がしたかのような霧が出ていたにもかかわらず、私と一緒にまたバルコニーに出ることを望んだ。(IV,757-758)

アランの子供時代そのものであるマルタヴェルヌの大地が、自分の「身から引き剥がしたかのような霧」によって二人を覆うのであり、モーリヤックの世界に慣れ親しんだ読者はそこに浄化の効果を感じずにはいないだろう<sup>13</sup>。

### 3 水と死

無垢、性欲と結び付いた水は、さらに死を連想させる不吉な顔を持つ。先ず、作中人物の病死や事故死の背景に水を見ることができる。『鎖につながれた子供』では、「危険な水」が仲のいい友達であったジャン＝ポールの母親とマルトの母親との死の遠因となる<sup>14</sup>。『夜の訪問者』のガブリエルの死を招くのは嵐による船の難破であり、彼の亡骸は「大西洋の深海」(I,444)を漂う。『宿命』のボブが命を落とすのも一つには雨による車のスリップのためである<sup>15</sup>。『醜い子』のガレアス、ギョーム父子は、川で溺死する(IV,371)。また『フロントナック家の神秘』は「かつて子供が一人溺れた水門」(II,568)を備えている。

水はまたモーリヤックの小説世界で語られる四つの殺人行為の背景にも描き込まれている。『テレーズ・デスケルー』の未遂に終わる夫殺しでは、テレーズはベルナルに毒を飲ませるためにそれを水の中に注ぐのであり、水は重要な小道具となっている。『黒い天使たち』のアリーヌ絞殺の場合は、雨に降り込められている(III,320)。そしてまたこの時凍りつくような雨に打たれたことが原因で、ガブリエル自身も病に倒れ、やがて命を落とす。また『海

<sup>13</sup> 『テレーズ・デスケルー』のベルナルとテレーズの新婚の夜にも水は現れるがそれは比喩の次元においてのみであり、この時水は不吉な様相しか呈さない。先ず初夜について、「雨に埋没した景色を前にしてその景色が太陽が照っている時にはどんなであるかを思い描くように、テレーズは性的快楽を発見した」(II,38)と書かれる。次いで、それに続く夜をテレーズは次のように回想する。「大抵の場合、喜びが最高に達しようとする岸で、彼は突然自分が孤独であることに気づく。陰鬱な休みのない動きが中断する。ベルナルは来た道を引き返し、打ち上げられたような状態で歯を食いしばり、冷たくなっている私を浜辺に見出すのだった。」(II,39)ここでの水は、テレーズのベルナルに対する強い性的嫌悪を反映するかのよう、死の色に染まって、性的快楽と救いとどちらも感じさせないものになっている。水と死の結びつきが正に次の節の課題である。

<sup>14</sup> 「1893年の夏はギュイエンヌのランドの上に耐え難い暑さでのしかかった。そこでは水は危険なものである。同じ月に熱の伝染病が二人の女友達の命を奪った。」(I,8)

<sup>15</sup> 「水たまりで一杯の道の上」の「ひっくり返って炎に包まれている車」が想起されている(II,189)。

への道』でランダンが変死を遂げる夜も雨模様である<sup>16</sup>。『ありし日の一青年』のジャネット・セリス殺害も水に深い関わりを持つ。彼女が「池」(IV,791)で水浴をしている時にアランが通りかかり、恐怖を感じたジャネットは森へ逃げ込んで樹脂採取をしていた男に犯され殺されるのである。さらに死体が「風車の上流のユール川の深い淵」(IV,798)に遺棄されるという風に、彼女の死は最後まで水につきまといわれている。

その上、水は自殺の背景にも現れる。最初に、自殺と直接的関わりを持たない水が主に雨という形で、自殺の問題となっている文脈に入り込んでいる例をいくつか見てみよう。エディットに無視されたことに端を発する『肉と血』のエドワールの自殺では、水は直接的関わりを持たないが、死を決意した彼が「屋根のトタンを打つ大粒の水滴」(III,317)に耳を澄ますというふうに、背景に雨という形で水の存在が指摘されている。『不眠』でも嫉妬に苦しみ「自殺、自殺」と考えながら、「ルイは雨の音を通して、ギーギー音を立てる市電、乱暴な車に耳をすます」(II,257)。『海への道』のオスカー・レヴォールが自殺するのも雨の夜であり、また『夜の終わり』において自分が冷たくあしらったジョルジュ・フィロの自殺を恐れるテレーズは、窓に近づいて「雨が降っている」ことを確認する(III,163)。

勿論、水は自殺の意志とより直接的なつながりを持ち得る。『悪』の結末においてファビヤンの陥る病気には、この二つの要素が融合している。

ファビヤンはその夜、シャン＝ド＝マルスやマジック・シティの人気のない岸をさまよわなければならなかった。雨は降っていなかったが川霧の湿気が彼の服にしみ込んだ。明け方、彼は部屋に戻り、手探りで服を脱いだ。朝、彼は熱で震えていた。(I,730)

この霧の中の彷徨は、はっきりと彼の死を望む気持ちとは結びつけられていないが、「常に病気は彼にとって阿片であり、身を滅ぼすべき別世界であり、終わりのない休息への歩みであるように思われていた」(I,730)と記されていることを見落としてはならない。ファニーとの断絶に苦悩して彷徨するファビヤンには身体を濡らすことで死へと通ずる休息に陥ることを望んでいる気持ちがあるのだ。『失われしもの』のイレヌ・ド・ブレノージュが夫の裏切りに絶望して薬によって闘病生活に終止符を打つ時は、薬を飲み込むため

<sup>16</sup> 例えばランダンとビエールが馬車に乗り込む場では、「雨が降っていた。」(III,685)とされ、またランダンと分かれたビエールは「雨模様の汚い歩道」(III,686)を歩いていくのである。



に水の助けを得る。語り手は絶えず彼女の死の床における水の存在に注意を払う。死の前の「カラフには半分水が入っていた」(II,340)状態は、死後には、「水の入ったカラフはひっくり返されていた」(II,341)と変わり、水が彼女の死の凄惨さを感じさせる要素となっている。

水と自殺との関係が最も明確に現れるのは、水のある風景が死に場所として選ばれる時である。既に言及した『醜い子』のガレアスとギョームの故郷の川での溺死には、父親による無理心中の可能性が示唆されている(IV,371-372)。実際に死に至らないまでも、死を漠然と想いながら水辺へと足を運ぶ作中人物は少なくない。『フロントナック家の神秘』では自分の詩を兄に馬鹿にされることを恐れたイヴの姿が、「彼は水車の方へ走り始めた。昔子供が一人溺れ死んだ水門のことを考えているのであろうか。」(II,568)と描写される。『ありし日の一青年』のアランもまた、死を予感しながら「水が凍りつくようなラペール氏の水車」(IV,790)へと足を向けるのだ。

また、既に引いた例からも明らかなように、作中人物はしばしば恋愛の苦悩から溺死を想像する。『鎖につながれた子供』のジャン＝ポールは「いかわしい体験」に失敗し、「黒い水に誘われて」(I,60)水の中での死を想う。

ああ、眠ること、際限のない眠りを眠ること……河の揺れ動く暗さの上に屈み込みながら、彼は思いきってその一言を口にする、死ぬこと。(I,60)

同様に『肉と血』のクロードも、メイが他の男と結婚して幸せであることに絶望して、「どんな黒い水に身を投げ、沈み込んでしまうべきなのか」と自問し、「河」を思い浮かべる(I,286)。

『癡者への接吻』の中では、性生活における不一致に苦しむジャンとノエミがある朝、ランドの中を散歩し、「井戸」を見出す。

ジャン・ペルエールの祖先にあたり、この砂漠の中で牧養権を享受していたベアルヌの牧人たちは何世紀も前に、そこに羊の群のための井戸を掘っていた。その泥だらけの口の縁で、夫婦は一緒になった。そしてジャンはペラグラというランドの神秘的な病に冒された年老いた羊飼いたちのことを考えた。彼らは決まって井戸の底か、渇の泥の中に頭を突っ込んだ状態で見出されるのだ。ああ、自分もまた、自分を練り上げてその似姿にしたこの食欲な大地を抱きしめ、この抱擁によって窒息してしまいたかった。(I,471)

若い美女と結婚したばかりの男に似つかわしくないジャンの不吉な願いにおいても、「井戸」或いは「渇」という死に結びついた地点は水に侵されている

る。

『愛の砂漠』では思春期のレモン・クレージュが、女性に対する羞恥心を克服できずに、死を「最も簡単なこと」(I,757) であると考ええる。

ある午後、彼はまどろんでいるワイン畑を横切り、荒れはてた平原を下ったところにある養魚池の方へ降りて行った。彼は植物や苔が彼の足に絡みついてきて、この泥水から抜け出すことができなくなって、もう誰も自分のことを目にせず、ついには口や目が泥でいっぱいになって、他の者が自分のことを見るのを見ないですむことを願った。蚊がこの水の上で踊っていた。蛙が小石のように、この揺れ動く闇を乱した。植物に捕らわれて、死んだ動物が白かった。(I,757)

自分が「醜さ、汚さの怪物」(I,754)であると信じていたレモンは、特に「若い女性たちの存在」(I,758)から逃れるために、この不吉な水辺の風景の一部となることを望むのだ<sup>17</sup>。

さらに、同じ小説の中でマリア・クロスが性行為に対する嫌悪から漠然と死を望む。マリアの望んだことは、「枝で一杯のこの空気の河で喉を潤すこと」よりはむしろ「その中に身を沈め溶けてしまうこと」であったとされる(I,828-829)。ここでも比喩の次元で水が意識の消滅を可能にするものとして現れている。

## 結語

モーリヤック小説の「神意に適った」子供時代の無垢、肯定されることのない刹那的な快楽である性愛、生の苦悩に終止符を打つ死という三つの要素が、水において結び付くのはなぜだろうか。先ず無垢と性愛は、思春期の作中人物の内で合わさり、周囲の者に敬虔な思いと性的誘惑の双方を感じさせる。既に見たレモン・クレージュ、マリ・ランシナングの他にも、クロード・ファヴロー、ノエミ・ダルティアージュ、アンヌ・ド・ラ・トラヴ等の名を例として挙げることができる。モーリヤックにとって、「非常に純粋な感情

---

<sup>17</sup> このレモンの思い描く死にはすぐにテレーズ・デスケルーの夢想する死を連想させる。『テレーズ・デスケルー』の結末で、故郷を離れて生きることになったテレーズが「私はある夜、ダゲールのようにミディのランドに向かって出発すべきだったのだ。[...]私には渴の水の中に頭を沈めていだけの勇氣はでなかっただろう（去年、嫁がご飯を食べさせてくれなかったためにそうしたあのアルジュルーズの羊飼いのように）。だけど、私にも砂の上に横たわって目を閉じることはできただろう。」(II,104)と考えるのである。テレーズがその勇氣はなかったと認めているとはいえ、彼女の頭に先ず浮かんでくる死には、やはりランドの渴の水に頭を沈めることであるのだ。

とそうではない感情との間にあるのは深淵ではない」のであり、「例えば友情の一つの枝からそれよりも乱れた欲望へ、ほとんど宗教的な愛から激しく官能的な愛への移行はほとんど知覚できない微妙な漸進のようなものによると思われる」のだ<sup>18</sup>。我々の考察した肉体の結ばれる場面に配された水は、この二つの要素を包み込みながら、人間への愛が神への愛と転化する可能性の示唆となっているのだ<sup>19</sup>。

次いで、性愛と死とのつながりを見るためには、上に引いた水を伴う自殺の衝動のほとんどの例において、死を願わせるのが恋愛感情のもたらす苦悩である点に着目する必要がある。死の衝動の根底にあるのは、主に性への嫌悪、嫉妬、離別などの人間に対する愛のもたらす苦悩から逃れたいという気持ちなのだ。

さらに、死と子供時代の無垢とを結ぶのは、故郷の水が多くの場合死の場所として選ばれていることからうかがえるように、肉体の目覚めから来る苦しみを逃れ、そうした苦しみを免れていた無垢な子供時代へ帰りたいという作中人物の願いであろう。子供時代の無垢へ帰ることはこの作家にとって、信仰に帰ることに他ならない。実際、水に囲まれて死んだ者の死は必ずしも不吉ではなく、自殺であった場合でさえ、死が宗教的平穩に満ちていることがある。『肉と血』のエドワールは死に瀕して折り、「プロテスタントであった彼の子供時代の奥底から、『信仰は我々を救う』という言葉が蘇る」(I,323)のであり、彼の死に顔は「永遠の鎮静」(I,325)に覆われて、駆けつけた彼の愛人には見分けがつかない程である。『失われしもの』のイレヌ・ド・ブレノージュも死ぬ直前に「彼女はついにこの愛をあらゆる名の上にあるその名前によって知り、見、呼んだのだ」(II,341)と記されている。また、殺人行為の際に雨に打たれて死へと至る『黒い天使たち』のガブリエルでさえも、おそらく彼の殺人を善意の行為と結ぶ故郷の水のおかげで、司祭館に迎えられて敬虔な死に方をする。浄化する水の存在がガブリエルの平穩な死に説得力を与える要素となっていることは疑いを入れない<sup>20</sup>。

<sup>18</sup> François Mauriac, *Lettres d'une vie*, Grasset, 1981, p.20.

なお『テレーズ・デスケル』の草稿のアンヌに関する部分に同様の記述がある (II,941)。

<sup>19</sup> モーリヤックは「人間への愛」と「神への愛」は対象を違えただけの同じ愛であり、前者が方向を変えることで後者になり得るとする。例えば『日記I』の中で「人間のふしだらな愛は方向を変えるだけで、一気に神に達することができた。」(François Mauriac, *Journal I*, in *Les chefs-d'œuvre de François Mauriac*, Genève, Le Cercle du Bibliophile, t.XI, p.22.)と書いている。

<sup>20</sup> さらに、水の中で死んだ者は、他の作中人物を浄化する役割を果たしさえする。『夜の訪問者』のオクターヴは「体がこの時に大西洋の深海を漂っている者 [ガブリエル] の存在をすぐそば

勿論、作中人物が思い描く故郷の荒涼としたランドの奥底の水の風景での死は、このような敬虔な死に方の枠には収まりきらない不毛なイメージを提示している。そこから感じ取れるのは、モーリヤックの主人公がしばしば示す大人として生活する能力の欠如であり、子供時代以後の故郷の外での生の拒否である<sup>21</sup>。水の中で子供時代の無垢、性愛、死の結ぶ円環には、この作家の描き出す子供時代の特徴である浄化、呪縛という二つの面が鮮やかに映し出されているのだ。

---

に感じて」(I,444)、カテドラルへ入り、跪いて祈り始める。「醜い子」のギョームの水死は、生前に彼の教育を拒んだロベール・ボルダスの目から、モーリヤックの小説において敬虔な子供時代の蘇りのしるしである涙を流させる。涙に関しては例えば『ホテルのテレーズ』の中で青年が語り手であるテレーズに説く次の言葉を参照のこと。「どんなにこの過去が重いものであったにしても、幾筋かの涙、私の額の上にかざされた手で、私が再び子供となるには十分であらうと彼は異議を唱えた。」(III,73)

<sup>21</sup> その典型的な例としては、『海への道』のドゥニ、ローズ・レヴォール姉弟、『ありし日の一青年』のアラン・ガジャック等の名を挙げることができよう。また、「子供時代へのノスタルジー」(V,714)に囚われて大人としての生活を受け入れられない読者からの手紙に答えて、モーリヤック自身も「子供時代を出るか出ないかでもはや子供出ないことに苦しんだ」ことを認め、そこに「私のインスピレーションの一つ」があったと記している(V,711)。